

面会室の扉が軋んだ音を立てて閉まつた。重い金属の音は、鉄格子の奥に沈黙を置いていく。

そこにいたのは、蹄のついた脚を組み、柔らかな布で目元を覆つた一人の獣人ミュータント

——いや、今や思想犯として収監された男、ヤフヤだつた。

「……何の用だい？ もう事件の供述は終わつたはずだろう」

ヤフヤは鼻先をわずかに動かし、訪問者の香りと足音からおよその人となりを測る。視界を日常に塞いでいる彼にとって、習慣的な行為だつた。

制服の布地の香り、そこに染みついた香水の香り、安物のペンの香り。足音はやや固い。……女で、まだ若手の記録管と推測できた。

時
「本日は、【メロン】氏についてお伺いします。あなたとは、古くからの関係にあつたとのことですですが」

「……ふむ、そう来たか」

食事のひと時

緊張が抜けきらない様子の記録管の声を受けて、ヤフヤは軽く鼻で笑う。けれども、その響きに軽薄さはない。深く何かを呑み込むように、息をつく。

「彼について、君たちはどこまで知ってるんだ？」

「……彼は無戸籍者です。市民登録にも該当のデータはありませんでした」

「だろうな。彼自身、お陰でいろいろ苦労していたよ」

それだけ言つて、ヤフヤは背もたれに深く体を預けた。頬の筋肉がわずかに引き攣る。かつての友人の名が、いかに苦味を含むものとなつたかを、その表情が物語つていた。

「彼のルーツについては、僕もよく知らない。僕とは違つて彼は、自分自身をあまり語るタイプじやなかつた」

ヤフヤは、鼻先をわずかに持ち上げた。思い出を掘り起こすように、記憶の土をひとつすくい、またひとつすくいとめくる。やがて、喉の奥で苦笑が漏れた。

「どこから話そうか。僕が彼に出会ったのは——そうだな、まだ十七歳ぐらいの時か。
ミュータント

街角で、化け物退治に巻き込まれた時だ」

ヤフヤの声が、少しだけ遠くなつた。音として変わつたのではない。言葉の奥に、
過去の温度が混じつた。

「随分派手にやられたよ。物音に気付いてこつちを覗く人もいたけど、すぐ見なかつ
たことにして去つて行つた」

「……彼はそうではなかつた？」
メロン

記録管の推測を、ヤフヤは首肯した。

「あつという間だつた。彼にとつては、あの程度慣れっこだつたろう。手早く三人の
男を叩きのめして、僕に手を差し伸べた。それが始まりだ」

ヤフヤの指先が机の縁をゆっくりなぞる。繋がれた鎖が微かに擦れ合う音が、室内
に新たな静寂を落とした。

食事のひと時

時ひとの事食

「組織を作ろう、と言い出したのも彼だった。表向きは能力者の自衛のため、だったかな……いや、もつと単純な言葉だった。“俺たちの居場所を作ろうぜ”。そんなふうに言つてた」

記録管は、その言葉の奥に揺れる何かを感じた。

それは確かに、今この面会室の中で語られる革命家の言葉だった。

だが同時に、そこには少年の面影もあつた。過去の希望に心を焦がし、その火傷の跡を隠しきれない少年の。

「彼は……群れを編むことの天才だった。暴力だけじやない、酒や冗談や、時には共感まがいの言葉で、居場所のない者たちを集めた。僕はそこに意味を見た。秩序からはじめられた能力者たちが、自らの力を肯定できる場所。夢想していた光景が、輪郭を結んだ気がした」

「……まるで、彼を革命の先達のように語りますね」

「そうだったとも。彼は先達だ。彼なくして、今の僕も【戦線】も有り得ない」
目隠しの下から、少しだけ鼻が鳴った。

「彼が【解放前線】を立ち上げると言った時、僕は正直、眩しかつた。僕なんかじや
辺り着けない場所に、彼はあっさり足を掛けてしまつた。無戸籍者で、職もなく、学
もなく、それでも街の誰よりも社会を読んでいた」

ヤフヤの語り口は、あくまで穏やかそのものだつた。だが、その芯には何か硬いも
のがある。敬意とも、軽蔑ともつかぬ思いが、彼の言葉の一つひとつにまつわりつい
ていた。

「彼にとつて誤算だつたのは、集まつた者たちがまっすぐだつたこと。誰も彼も、ほ
んとうに変わりたいと願つていた。差別を無くしたい、仲間を守りたい、意味を持ち
たい——そんな、真剣な眼差しばかりだつた

「彼は……嫌がつた？」

食事のひと時

時ひとの事食

「笑っていたよ、最初は。うまくいつたって顔をしてね。旗を掲げただけで、勝手に人が集まる。言葉もいらない。力を示せば、それだけで従う。彼は“群れ”が動き出す音を聞いていた筈だ。でも、そこにあつたのは、従順な兵隊じやなく、希望を信じる人間たちだった」

目隠しの奥に沈黙が流れ、その耳が、わずかに動いた。

面会室の空調の音が、鉄と埃の匂いを運んでくる。だが彼の意識は、今そこにはなかつた。昔日の、熱と、声と、視線の渦にあつた。

やがて、ヤフヤが再び口を開いた。

「……そこからは早かつた。彼は徐々に口数が減つていったよ。居場所が狭まついくのを、きっと本人が一番感じていたはずだ」

「そして、あなたが彼を追放した？」

「……ああ。僕が言った。“もう君にはいてもらわなくていい”ってね」

やや間を置いた言葉は重く、それでいて明瞭だった。紙に落としたインクのように、言葉がゆっくりと沈み、拡がっていく。

「彼は喚いたり暴れたりはしなかった。ちょっと笑って……それから姿を消した。恨み言一つなかつた。その手の“別れ”に慣れていたんだろう。たぶん、ずっとそうやつて生きてきた。僕らが彼らを見限つたんじやなく、むしろ逆だつたのかも」

記録管は、しばらく言葉を継げなかつた。

ヤフヤの声に、悲哀はなかつた。あまりに静かで、あまりに乾いていた。その乾きの中に、湿り気のある哀しみが、影のように張りついていた。

「……最後に、彼と会つたのは？」

「グニ。パヘリル街での件の、三日前だ」

記録管が、思わず息を呑んだ。空調の音に紛れる程度の微かな音だったが、それを聞き取つたらしいヤフヤの耳がひくつく。

食事のひと時

時ひとの事食

「バーで偶然会った。正直……声をかけるかどうか迷ったが、向こうは気にしていな
いみたいだった」

「どんな話を？」

「他愛のない話さ。昔の仲間の近況、酒の味、街の騒がしさ。彼の調子は一緒にいた
頃と変わらなかつた。時間だけが通り過ぎて、彼だけが置いていかれたみたいだつ
た」

今度はヤフヤが、息を吐いた。その息は笑いにも、嘆きにもならず、重く空気を搖
らすだけだつた。

「最後に言つたんだ。『また群れでも作るのか？』って。『もういいよ、めんどくせ
え』って笑つてた。……本心だつたと思うよ」

ヤフヤの語り口は淡々としている。その余白の多さが、むしろ記録管の胸を締め付
けた。言葉にされない何かが、壁に染み、空気を濁している。

「……あなたは、彼の最後をどう受け止めていますか？」

ヤフヤはしばらく考えるように口を閉ざした。沈黙の中、彼の蹄がかすかに床を打つ音が面会室に響いた。それは時間を刻むようでもあり、何かを探る足音のようでもあつた。

「誤解を恐れずに言うなら、彼は……よく生きたと思うよ」

記録管の手が止まつた。思わず顔を上げた彼女の視線に、ヤフヤは目隠し越しに応じる。

「彼は諦めたとか、自暴自棄になつたとか、そういう感じじゃなかつた。やり方はどうであれ、グニ・パヘルルでの事件は、彼が生きようとした結果だと思う。牙を剥いて、手を汚して——ただ、世界がそれを許さなかつただけさ」

時 怒りも悔いもなかつた。ただ静かで、正しさや間違いでは測れない何かが、そこにあつた。

食事のひと時

時ひとの事食

「誰も弔わないだろう。名も、墓も残らない。けれど彼は、僕の始まりだった。理想に燃える僕に、現実という名の鋳びた刃を突きつけてきた男だ。切り捨てたつもりでも、結局、僕の中にはまだ彼がいる」

少しだけ間を置いて、彼は続けた。

記録管は、もはや彼の言葉を書き留めてはいなかつた。ただ黙つて、そこにいた。

——面会時間、終了です。

機械的なアナウンスが響き、室内の空気が切斷されたように変わつた。

記録管が立ち上がり、ヤフヤに一礼する。彼は立ち上がりもせず、目隠しの奥でただ頷いた。

面会室の扉が開き、記録管が出ていく。重い金属の音が再び響いた。

その音を背に、ヤフヤはただ一人、静かに呼吸を続けていた。言葉を失つた空間の中、彼だけがまだ、語りの続きを生きていた。